

# 特集

## 公開研究会

# 「人びとの暮らしと生業 『日本近世生活絵引』 作成への問題点をさぐる」を振り返って

## A Look Back at the Workshop on Obtaining Historical Information from Pictures

### How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 1

## 『日本近世生活絵引』の作成をめざして 近世の北陸農村と松前地漁村の人びとの暮らしと生業

### Life and Work of Hokuriku and Hokkaido in Edo Era

田島 佳也 (神奈川大学日本常民文化研究所 教授 / 事業担当推進者) TAJIMA Yoshiya

#### はじめに

2006年12月16日、COE1班では「人びとの暮らしと生業」と題して公開小研究会を開いた。これは日頃、『日本近世生活絵引』（以下、『絵引』と略）作成を試みてきたいわばその試作品を公開し、参加者に試作品の出来ばえや問題点などの意見を求めるために行ったものである。当日の発表者は本学COE構成員の菊池勇夫と田島である。菊池は、すでに18世紀末、菅江真澄が何がしかのヒントを得て景観や事物の「形」をあるがままに写し取った図絵を「かた」（図・画）と呼び、1788年（天明8）6月、仙台藩領前沢を出発して松前に向かい、盛岡藩領を北上したときの日記「委波氏迺夜摩」以来の図絵手法で、寛政3年の『蝦夷廻天布利』などでアイヌ絵引を作成しようとしていたことを『絵引』をする菅江真澄（菊池 2007<sup>(1)</sup>）と題し、「烏秀の瀧」（ウスの瀧）を例に明らかにした。

田島は2006年10月28、29日に神奈川大学で行われたCOE国際シンポジウムと同じく（田島 2006-2）『農業

図絵』（清水 2005<sup>(2)</sup>）を題材に「城下金沢と近郊村に生活する人びと」に焦点を絞って『絵引』作成の一端を紹介した（田島 2006-1<sup>(3)</sup>）加えて、18世紀中ごろの平沢屏山作と目されている、函館市中央図書館所蔵『松前松山屏風 江指浜鯨漁之図』を材料に「江差浜における鯨漁と加工に勤しむ人びと」を『生活絵引』にした。ただ、この『江指浜鯨漁之図』の原図については不明で、事情は以前に『非文字資料研究』No.11（田島 2006-2<sup>(3)</sup>）で述べておいたので、それを参照されたい。さらに、この『江指浜鯨漁之図』は江差浜に続く厚沢部川口の土場、柳崎の檜材集材場などを描いた『松前松山屏風 上ノ国材木流之図』（北海道編 1937<sup>(4)</sup>；江差町編 1982<sup>(5)</sup>）と対になっているもので、後者にも柳崎などの海岸における鯨加工の様子も描かれており、そこから『絵引』化を試み、披露した。本稿では、筆者が試みたその『絵引』化の一端を紹介することにしたい。

#### 『絵巻物による日本常民生活絵引』と類似作品について

これまで字引に類する『絵巻物による日本常民生活絵引』（以下、『常民絵引』と略）といえ、学問には素人と明言していたといわれる澁澤敬三が、昭和15年（1940）以前から、字引とやや似かよった意味で「絵引は作れぬ

ものか」という発想から生まれた。そして、画伯や歴史学・民俗学などの専門家を集め、勉強会を開き、澁澤の没後も彼の遺志を引き継いで大変な苦勞を重ねて作られた（澁澤 1984<sup>(6)</sup>）その『常民絵引』とは描かれた絵を

切り取ってきて、その描かれた部位に番号を付け、それに名称を付すものであるが、『常民絵引』の作成は前人未踏の試みであったといつてよいであろう。

しかし、その『常民絵引』と少し方法は異なるものの、菊池が明らかにした、先に掲げた菅江の図絵に関する考察をみると、すでに『常民絵引』的発想は早くからみられ、澁澤のまったく新しい、前人未到の発想というべきものでなかったことがわかる。おそらく、丹念に調べれば菅江が試みたような事例がまだほかにもあるに違いない。ただ、菅江と澁澤の大きな違いは、菊池が的確に指摘しているように、菅江は同時代の人間を対象に、自分の作品を読む人々に説明をより一層解りやすく、かつ理解を促すために、自ら写生をし、写生物の個々に番号を付したのであるが、それに対して澁澤の『常民絵引』は、過去に描かれた図絵、とくに文献も数少ない、はるか中世に描かれた屏風絵や絵巻物を対象に、そこから切り取った図絵を読み取り、できうる限りの名称と説明を付けようとしたことにある。その意味では両者の試みに通底するものがあるものの、それぞれの作品は全く異なるといえよう。ただ、歴史学や民俗学、人類学などの多くの有能なブレインを抱え、自らもそれらの学問に造詣の深い澁澤が菅江などの作品からヒントを得た蓋然性が高いといえなくもない。そうではあっても、澁澤の立脚点にたてば、『常民絵引』全5巻、付総索引(角川出版社刊)はまったく斬新な作品と評価できようか。

この『常民絵引』と同じような作品は以後、長く作られることはなかった。それに類するものは近年、例えば『江戸商売図絵』(三谷 1986<sup>7</sup>)や『図録 農民生活史事典』(秋山他 1991)など数多く出版されたが、それらの多くは慶應3年(1867)に出版された喜多川守貞『守貞謾稿』(朝倉 1992<sup>8</sup>)に倣ったもので、『図絵』や『図録』といわれるものである。『絵引』といえるものではない。

『絵引』という形で作成されたものはこれまで日本中世を対象とした『常民絵引』だけしかみあたらない。

そうしたなかで、『大江戸日本橋絵巻 熙代勝覧の世界』<sup>(9)</sup>(以下、『熙代勝覧』と略)は『常民絵引』にかなり近い作品といえようか。この作品では日本橋通り界隈に集う商人や買い物客、通行人などに番号が付され、文献の博搜や専門家を集めた歴史的考証による名称や説明が加えられている。とくに、店の玄関に掛けられた暖簾の屋号からそれぞれの店名を調べ、商家の事績などの解説が付けられ、絵図をみながら読者は商家の歴史を学ぶこともできるなどの配慮がされている。そのみではなく、幕藩体制下の大都市、大江戸の役割も、都市の構造やそこに集う人々の姿を紹介するなかで理解できるように気配りされている。ただ、『熙代勝覧』は日本橋通りに集う人間に多くの関心が向けられたせいも、建物の形態や各部の名称や説明が少なく、店に掛けられた暖簾などの種類に注意が払われていないなど、惜しい点も数々ある。しかし、近年にはない、かなり丁寧な精度の高い作品である。こうした特徴から『絵引』に近いと指摘したが、描かれた絵を切り取ってきて番号を付けるということを、この『熙代勝覧』では行っていない。その点では『絵引』とは似て非なるものであるが、むしろ『熙代勝覧』の分析に関わった人々にとってはこの作品を、いうところの『絵引』の範疇に含められるのをよしとしないかもしれない。『熙代勝覧』は『絵引』の作成手法とは出発点で異なるが、むしろ多くの専門家を集め、時間をかけて事物の考証を文献などの博搜を通じて行なった点で『常民絵引』と同じ方法を踏襲しており、しかも日本橋界隈の都市機能としての役割、大都市江戸の台所(経済)に焦点を据えた分析は『絵引』にはない新しい試みである。その意味では『絵引』を越える作品と評価できる。その分析方法、解説の取り組みは見習うべき点が多い。

## 地域で生活する人びとの暮らしと生業

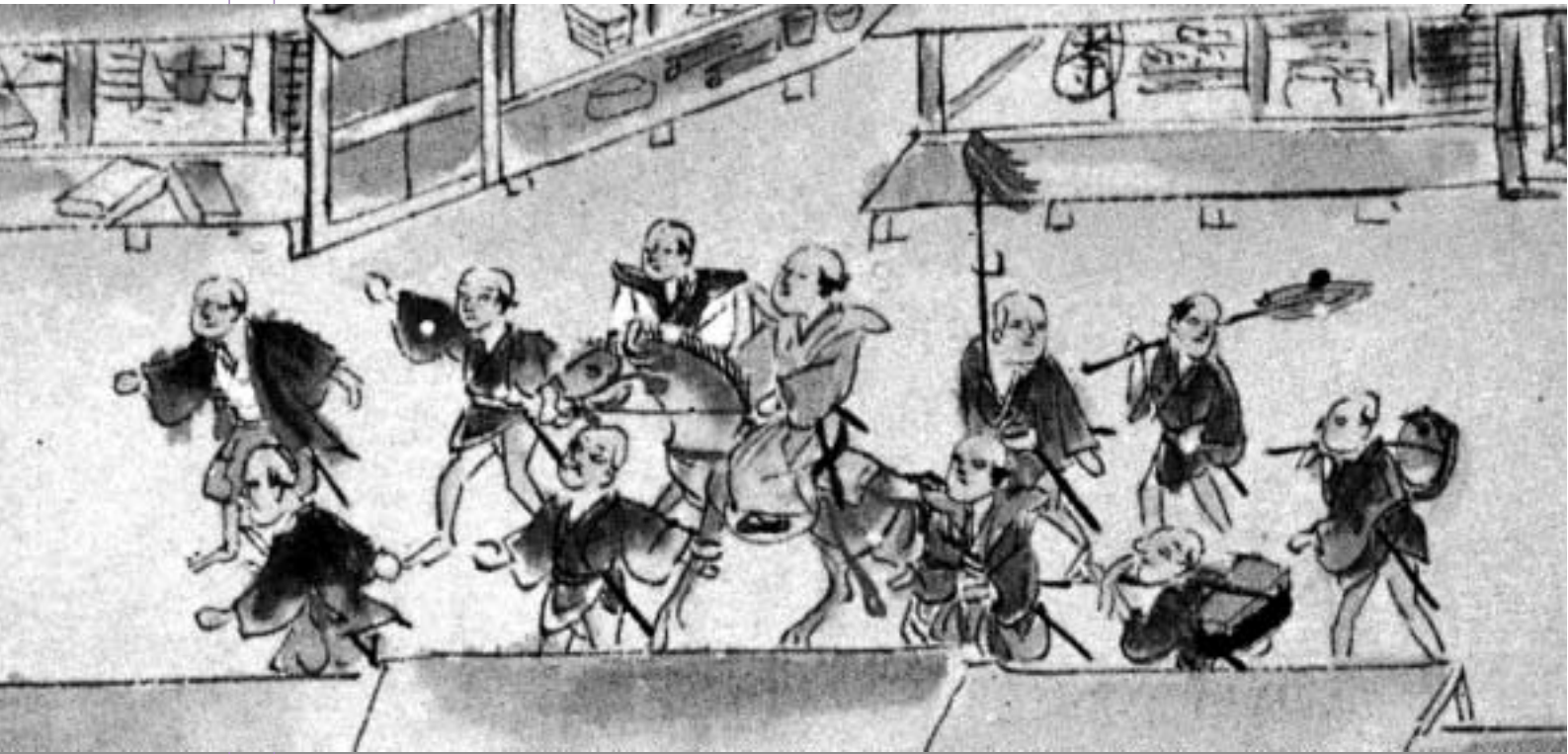
澁澤の遺志を引き継いで、新たな『絵引』がこれまで作成されてこなかったのは、作成には多くの専門家が必要か、そうでなければ持続的な研究と作業(時間と費用)が伴うものであったことを如実に物語るものにほかならないだろう。『絵引』作成の再チャレンジも条件は厳しい。とはいえ、解決の糸口を模索しつつ進める必要がある。地域で生活する「人びとの暮らしと生業」なる小研究会を設けたのも、その一環である。独断に陥りやすい『絵

引』作成の問題点を、英知を結集して探ることを意図した。当日はアイヌ風俗・歴史などの知見に詳しい児島恭子(早稲田大学講師)、舟山直治(北海道開拓記念館学芸員)、幕藩制下のジェンダーの視点から『農業図絵』を分析した長島淳子(早稲田大学講師)の各氏の参加を得た。以下は、その小研究会に提示した筆者の試論的『絵引』の一部である。

1. 城下金沢と近郊村に生活する人びと（18世紀初め）

1 金沢城から下城し、浅野川大橋界限に達する武士団の行列

（『農業図絵』より）



容姿・動作

|                        |                        |                            |                      |                       |    |                          |                       |                      |    |
|------------------------|------------------------|----------------------------|----------------------|-----------------------|----|--------------------------|-----------------------|----------------------|----|
| 馬上の武士                  | <small>かたぎぬ</small> 肩衣 | <small>わきざし</small> 大小の脇差刀 | <small>はかま</small> 袴 | <small>ぞうり</small> 草履 | 馬  | <small>おもがい</small> 面懸   | 鼻括り革                  | <small>くつわ</small> 轡 | 手綱 |
| <small>むながい</small> 胸懸 | 下鞍と鞍                   | 羽織                         | 裁着袴（カルサン）            | <small>とう</small> 藁   | 立傘 | <small>かっぱかご</small> 合羽籠 | <small>はさ</small> 挟み筥 | <small>はこ</small> 篋  |    |
| 床店の茶売り店                | 床店の箱屋店                 |                            |                      |                       |    |                          |                       |                      |    |

金沢城を下城し、浅野川大橋界限に達した武士団の行列である。馬上の武士に従う供の武士達は身分によって行装も異なっている。また、統制が取れていない行列の様子から、屋敷に急ぎ帰る下級武士団の姿が窺われる。あるいは、近世初期、行列は整然としたものでなかったかも知れない。行列では右足、右腕を同時に出して歩いていわゆる「ナンバ歩き」が特徴的である。この歩き方がかつての日本人の歩行スタイルであると言われている。近年では日本人の体型にあった歩き方、また伝統的古武術に欠かせない歩行として注目されている。また、馬上の武士以外、裸足であることも注目される。

It is interesting to examine how to use pictorial materials in historical studies.  
 For example, we have some picture scrolls.  
 They are valuable materials for our studies.  
 Some of them were drawn in about the 18th century.  
 They are messages from people in the 18th century to us, but pictures are only pictures.  
 They are not clear enough for use in historical studies.  
 The difficult point is knowing how to extract real information and facts from them.

2 春、馬耕(犁)に勤しむ百姓の傍らで休憩、あるいは花見をしている家族

(『農業図絵』より)



娯楽・交際

桜の木? 胡坐をかく百姓 着物 ゲイ呑み 皿に盛られた惣菜 酒樽?  
 頼杖の子供 着物 帯 酒を呑む頼被りの百姓 一服する爺 煙管 桶  
 牡丹餅? 白襦掛けのグル鬚女性 股引 小桶 木椀 虫除けの松明

この図絵は実は「堅田一番返し」(一回目の乾田犁返し)の情景、すなわち馬犁に従事する百姓を描いた図絵の中の一部である。馬犁をしている傍ら、桜の木の下で酒や料理を食べている家族や連れの百姓の姿を描いたものである。当時、馬耕に勤しむ百姓の傍らで、こうしたことが許容の範囲内であったとしたら藩体制下の百姓世界、百姓の存在形態を再考する余地はまだかなりあろうか。また、百姓世界の娯楽の在り方を考察する一助になりうるか。なお、一服している老人は神奈川大学日本常民文化研究所蔵本『耕稼春秋』では老婆として描かれているように見える。だが、女性の喫煙習慣は18世紀にはまだなく、19世紀になってからという(長島淳子『幕藩制社会のジェンダー構造』校倉書房 2006年)

3 年末の冷たい川での洗濯風景

(『農業図絵』より)



衣服・年中行事

てどりがわ 手取川で洗濯する女性      こそで 小袖      たすきが 褌掛け      股引      たらいおけ 盥桶      てつたが 鉄箒ね      洗濯物  
 洗い上がりの洗濯物      赤子を肌負いする母親      頭巾風被り      下駄      まえだ 前垂れ  
 放髪の少女      筒袖の着物      裸足      尻端折り姿の百姓      手拭い被り      ふんどし 褌  
 草履      踏み鋤      ①平鋤      ②天然腕木(又木)      ③天干ししている着物

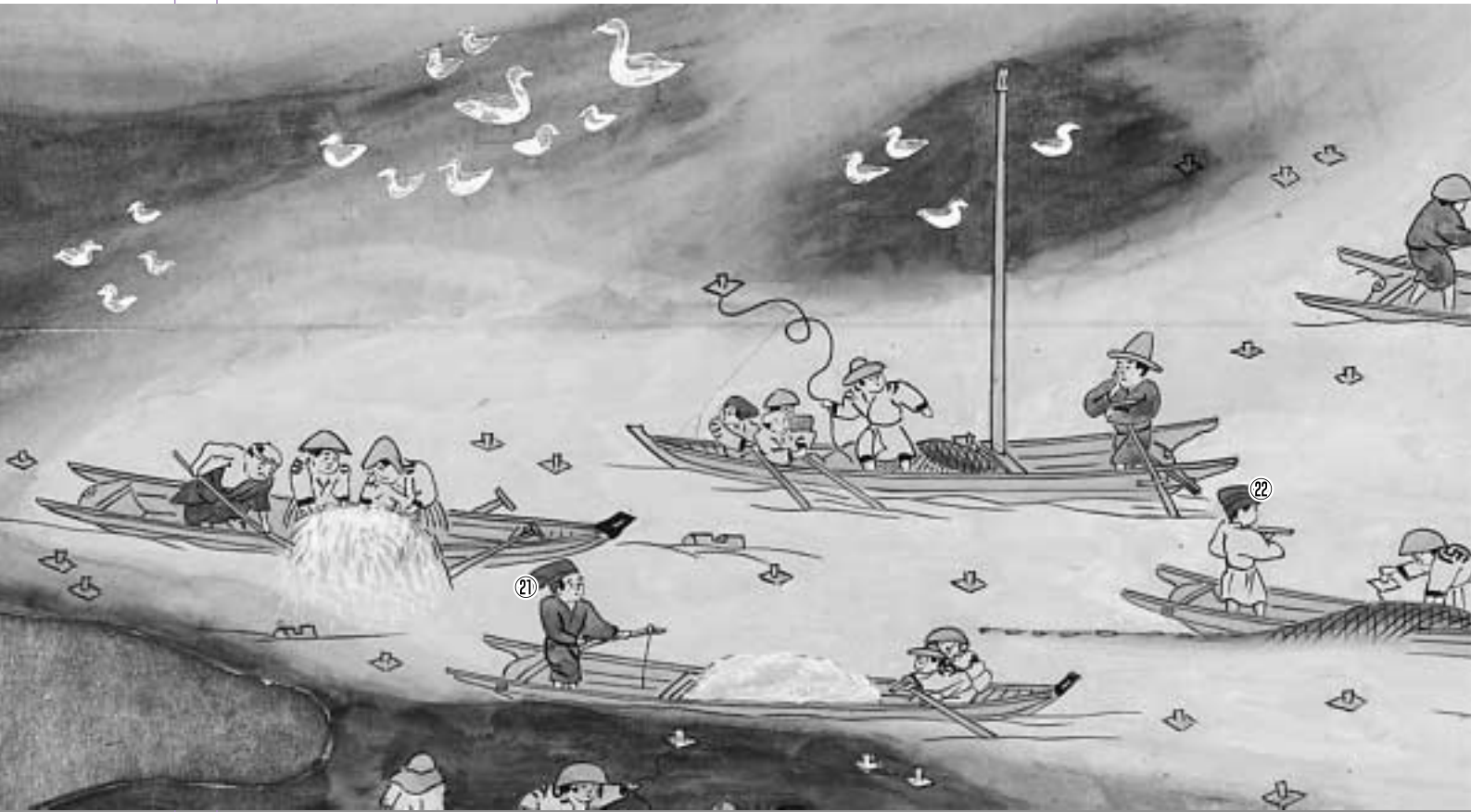
図絵をみると、後景には古来霊峰として加賀の人々に崇め奉られてきた日本三名山の一つ、白山が描かれており(上図にはない)そこから流れ出た手取川の川岸で、新年を迎えるために年末に溜まっていた汚れ物を洗濯している。12月の川はかなり冷たく、川の中に入って洗濯する女性にとってはきつい労働であったに違いない。この洗濯の時には普通、洗濯水で足が濡れないように下駄を履く。川中に入る時には当然、下駄を川辺に脱ぐが、図絵の洗濯女性は川辺に脱いだ下駄もないことから最初から裸足であったと思われる。しかし、洗濯物を運んできた女性は下駄を履いている。洗濯女の後ろに鋤を担ぎ、鋤を持った農夫がいるが、この農夫も農具を洗いに来たのかも知れない。あるいは、洗濯場の足場の直しも行ったか。恐らく洗剤には米糠や米の研ぎ汁、灰汁が利用されたに違いない。ただ、この図絵には木台や石台が描かれていないことから、砧打ちによる洗濯は行われていなかったか。

## 2. 近世中後期、江差浜における鯨漁と加工に勤しむ人びと

以下、『江指浜鯨漁之図』（通称『江差屏風』とも）と『上ノ国材木流之図』（通称『桧山屏風』とも）の一部に描かれている鯨漁に関する屏風絵で、生産から加工にいたる流れで鯨漁撈を追った。

### 1 にしんさしあみ 鯨刺網漁の様子

（『江指浜鯨漁之図』より）



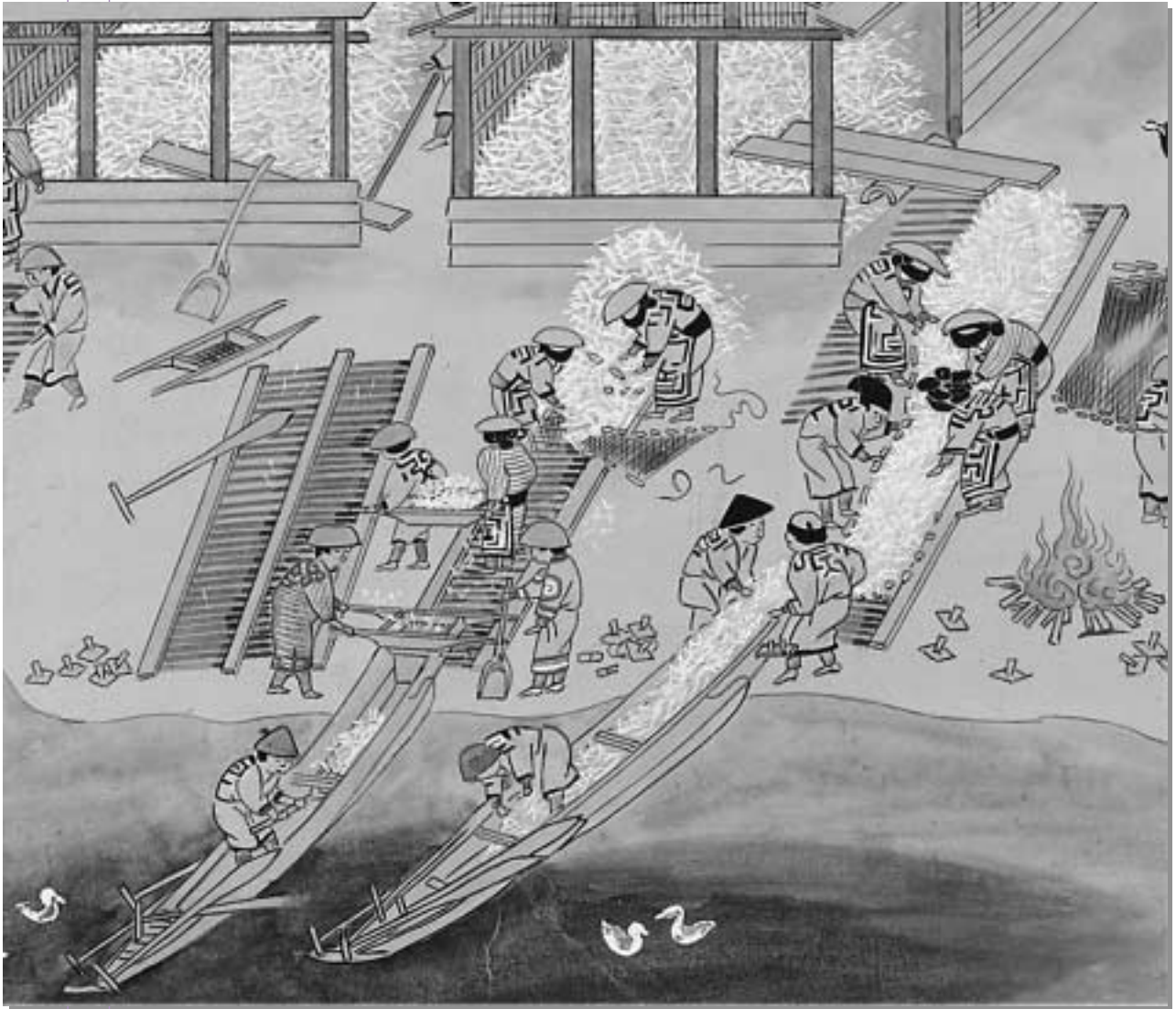
容姿・動作・労働

鷗（ゴメ） 鯨くきの群来で白濁した海 さんばぶね三半舟（鯨舟） みおしへさき水押（舳） とも鱧  
さっかい帆柱 早かい權 早權の權引き縄（輪縄） ろ櫓 るなわ櫓縄 藁製刺網  
 浮標（タズ、アルケダンプ、ボンデン） ヤリ網 家印木 ヤかぎツサイ鉤 鯨（鮭、鮠、青魚、春告魚）  
ねじ捻り鉢巻き 編み笠 防寒頭巾 藁帽子 ①シコロ付角頭巾 ②桂包？

春告魚（鯨）の漁期は2～5月の3か月である。群来は夜から朝にかけてあり、漁民たちはそれを群れたゴメの騒々しい鳴き声と雄鯨の海岸海藻（ゴメ）への射精による海の白濁化で知った。江戸時代、江差前浜は自由に操業ができる入会の海であったため、近隣諸村からも鯨舟が我れ先に出漁して盛況を極めた。漁民たちは他人の網と区別するために浮子と自分の家印木（桐製）を付けた刺網を思い思いに鯨舟から海中に下ろし、網にまるで昆虫のケラのように突き刺さった鯨網をヤツサイ鉤で引っ掛けて舟上に引き揚げ、櫓と櫓を操って浜に運んだ。描かれた図絵が正確に写生されたものかどうかの確認は甚々難しいが、正確であったとするならば、鯨舟には舳があるので小型の保津舟ではなく、遠距離でも運べる三半舟（帆柱を付けられる）であったといえる。また、操業や操船漁民たちの中には刺子（ドンザ）を着ている者、普通の着物を着ている者が見受けられ、漁撈には思い思いの格好で漁に参加していたことを知りうる。ただ、漁期は厳寒の冬である。諸肌脱ぎや裸足、軽装に過ぎる漁民がいるのは、疑問に感じられる。

2 江差浜に運ばれた鯨を網から外す

(『江指浜鯨漁之図』より)



容姿・動作・労働

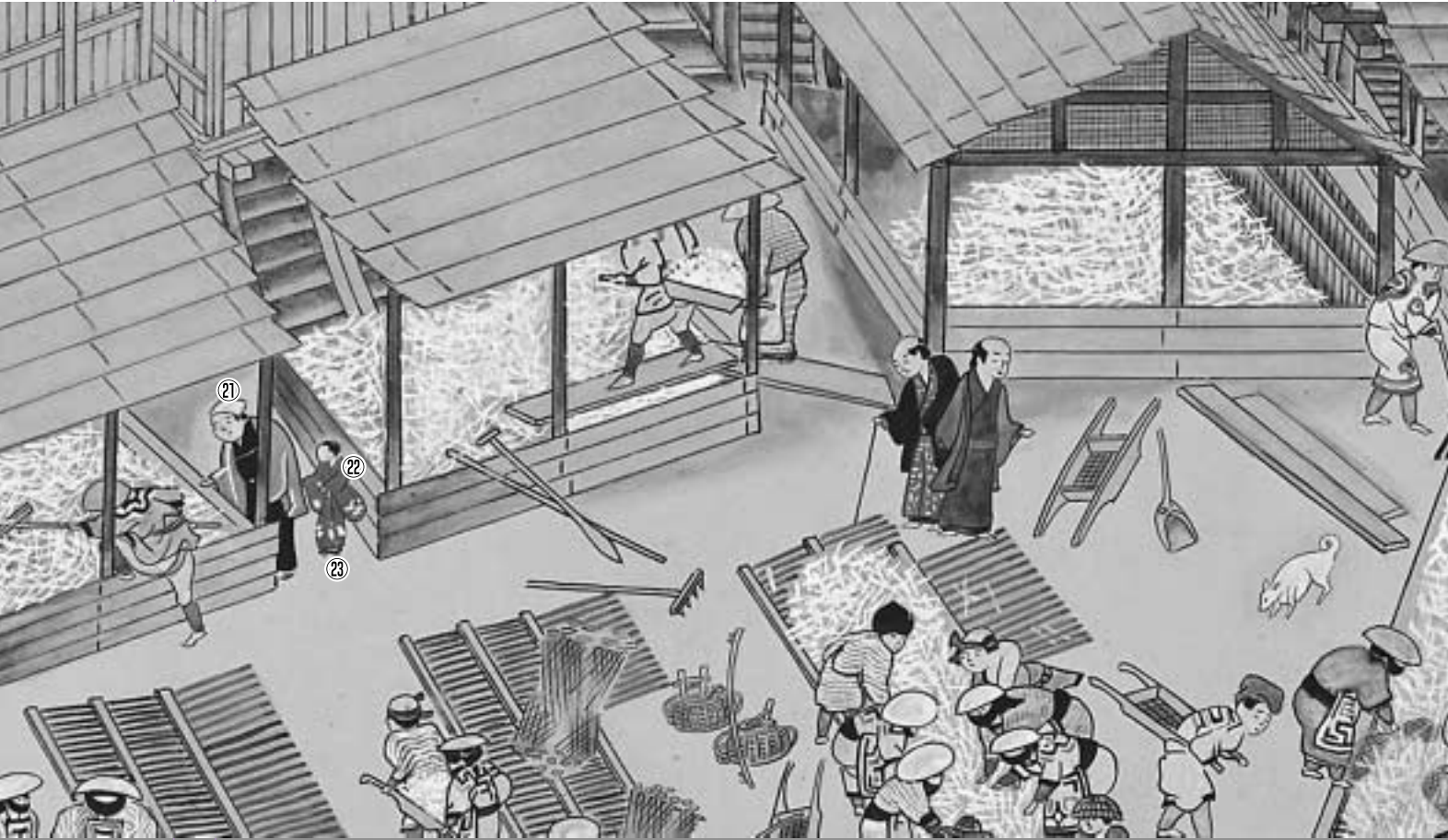
磯舟 早權 厚刺(アットウシ) 菅笠 黒塗り笠 筒袖短着の刺子(ドンザ)  
 黒頭巾 防寒黒覆面 肩上げ紋 <sup>みのかが</sup> 蓑掛り鯨 <sup>すたい</sup> 簀台 刺網 浮子(アバ)  
 ナツ石(沈子・イワ・シズミ) 鯨の網外し <sup>てもっこ</sup> 手畚(たなぎ畚) <sup>もっこ</sup> 木製掬い鍬 <sup>すく</sup> 焚き火  
 浮標(タズ・アルケダンプ・ボンデン) <sup>きやはん</sup> 脚絆(はばき)

刺網に蓑(ケラ)状にぎっしり突き刺さったままの鯨をそのまま浜に運び、浜に拵えた簀の上に引き上げ、待ち構えた漁夫や漁婦が網から鯨を外した。アットウシやドンザを着た漁夫や漁婦が焚火の横でかすかな暖を取りながら、網からの鯨外しに精を出している。漁婦のなかには寒さを凌ぐために防寒用の黒い覆面で顔を覆っている者もいた。しかし、足もとに目を向けてみると、真冬にも関わらず、足に脚絆をしている者がいるものの、皆、裸足である。簀のそばには焚き火があるが、暖をとっているほど暇ではない様子である。

網から外された鯨は随時、木製の掬い鍬で手畚(たなぎ畚)に入れられ、二人して鯨の一時的貯蔵庫である廊下に運ばれた。鯨舟から浜辺の簀へ、簀上の鯨外しが終わったら、随時漁舟や漁具、簀、運搬具などの点検と水洗い(海水による)、片づけが並行して行われた。

3 廊下への鯨の運搬と貯蔵

(『江指浜鯨漁之図』より)



容姿・動作・労働

長板横葺き屋根の廊下 柱 板壁 踏み板 蓑掛り鯨 コマザライ  
 手畚(たなぎ畚) 木製掬い鍬 櫂おうご 杓(天秤棒) 箕 刺網 魚籠びく 白犬  
 江差商人か、漁場の親方・支配人? 羽織 木杖 帯 脚絆(はばき) 着物

①白頭巾 ②赤振袖姿の少女 ③下駄

江差浜の海浜幅は狭く、浜辺近くまで江差商人の桧板・榎板化粧をした土蔵が迫っていた。その土蔵手前の浜には、網から外した鯨を加工のための魚坪なつぼに運ぶ前に4、5日貯蔵しておく、貯蔵庫(廊下)が造られた。廊下は鯨の漁獲高次第で、外壁の板が高められ、より多くの鯨が貯えられるように簡易的に造られていた。廊下に鯨が貯まると、漁夫はコマザライを使って、より多くの鯨が入るように均し、あるいは魚坪に運ぶために寄せた。鯨を廊下に一時的に貯蔵するのは数の子が固くなり、腹が柔らかくなって鯨潰しがしやすくなるためである。

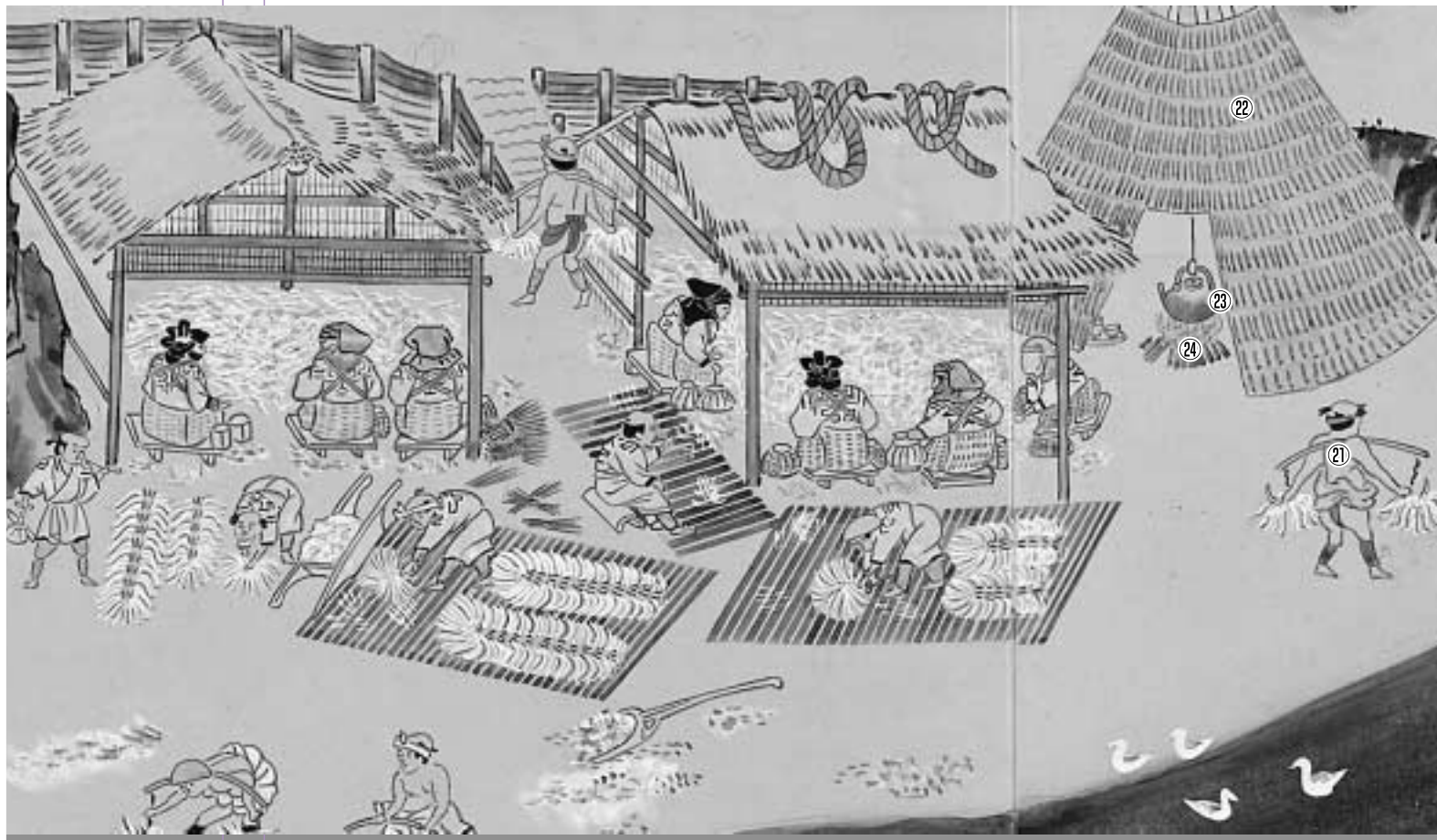
ところで、漁夫たちが鯨外し、鯨の運搬と、戦場のように忙しい浜に、鯨場の親方と支配人、あるいは鯨漁況の視察にやってきた羽織姿の江差商人と支配人であろうか、仕事ぶりや鯨の良悪を見にきた様子が描かれている。また、廊下の傍には振袖姿の少女を連れた町人と思しき見物人も描かれている。鯨漁が江差町全体の経済と生活に密着していた漁業であったことを窺わせる。白犬が浜をうろついているのも生活感が感じられる。





4 鯨漬しと鯨干場への運搬

(『上ノ国材木流之図』より)



容姿・動作・労働

- なつぽ 魚坪 藁葺き屋根 棟押さえの太縄 鯨 風呂敷の頬被り ムマ(腰当・腰掛・馬板)
- 手篋 シロシタ(吠様の蓆の膝入れ) 黒頭巾 菅竹(サシ) 菅縄緒(繋ぎづら) 菅藁座すげござ
- 鯨の尻繋ぎ作業 繋ぎ連つらの鯨(10~20連) 手釜(たなぎ釜) 口腔を刺した尻繋ぎ鯨
- 洗い鉤付き天秤棒 木皮綱 褌 脚絆 ①裸姿の漁夫 ②蓆囲いの掘立て丸小屋 ③薬缶 ④薪火

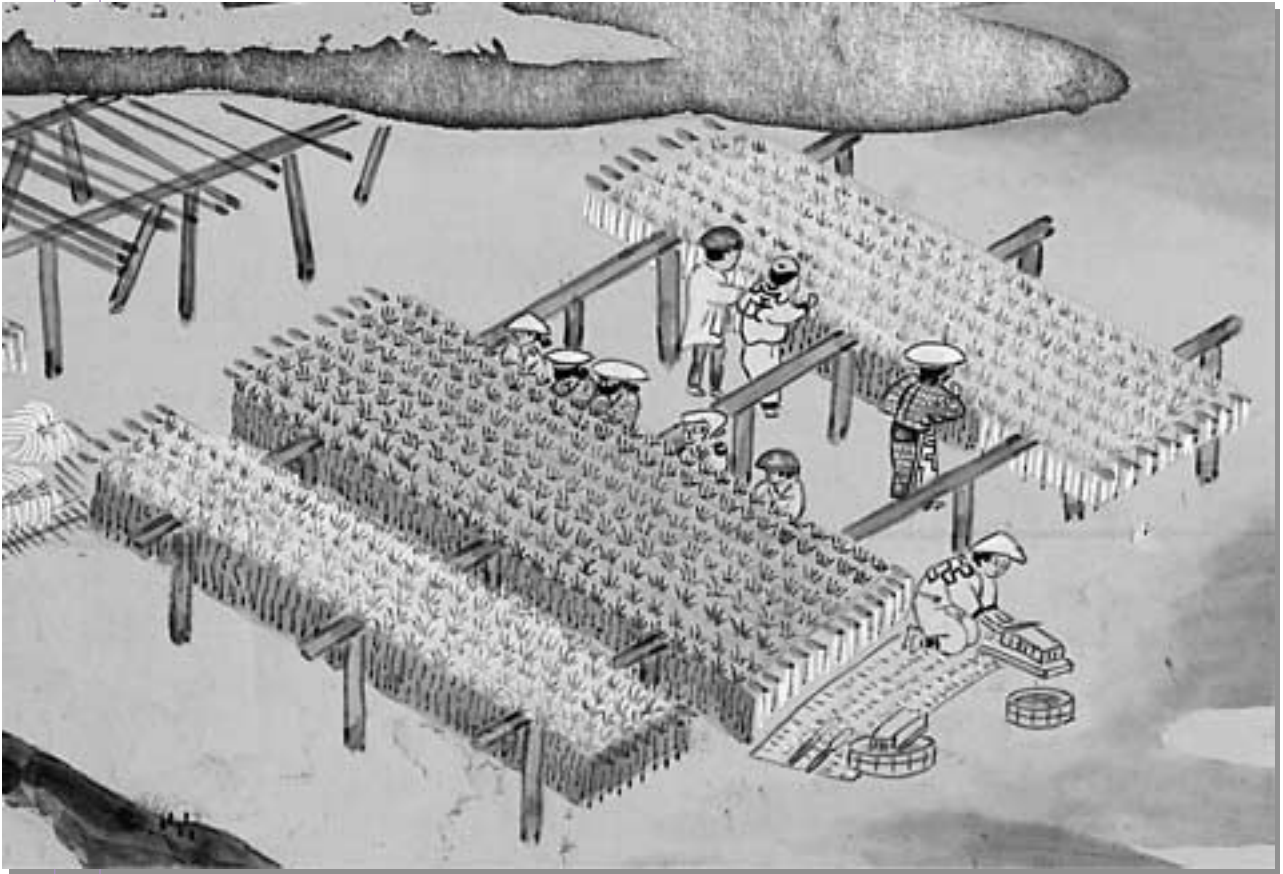
漁婦が廊下から魚坪に運ばれてきた鯨を、ムマに座り、足をシロシタ(吠様の蓆の膝入れ)に入れて鯨漬し(鯨の数の子や白子、鰓、内臓などを身から選り分ける作業)をしている様子。寒さと魚の臭気、魚脂粉に見舞われての作業であった。鯨漬しは手首(指5本が別々になっている指サック、指袋)を使って選り分けられ、鯨の口腔に菅竹を刺し、菅縄緒で連結し、干場に運んだ。連結鯨は大体10~20連、1連は21匹であった。端数は木架(魚架。早切に吊した鯨を干す)などで腐って、あるいは重みで落下し、商品にならないものがあるための補填対策といわれる。

魚坪の近くに漁期だけの荒縄結束、蓆囲いの掘立柱の丸小屋がある。浜小屋ともいう。上から吊るされた薬缶が火に架けられている。漁夫漁婦たちの休憩場所である。19世紀に入ると、鯨場の仕込が始まる4月頃から本州諸港へ向う海運の絶える9月頃まで、丸小屋は江差町会所から許可を得た諸商人が、出稼ぎ漁夫や旅人、船方相手に飲食や雑貨、古手などを商う店や遊行・遊戯店となった。幕末には下級花街店にもなった。

図絵で注目されるのはやはり半裸の漁夫たちの作業姿である。厳冬の鯨漁季から見て、疑問に思われる光景である。

5 鯨干場での身欠鯨の木架干し

(『上ノ国材木流之図』より)



容姿・動作・労働

鯨干(乾)場 桁 竿又(マツカ、赤木) 早切 白菅笠  
 菅笠 手拭い頬被り 防寒黒覆面 厚刺(アットウシ) 刺子(ドンザ)  
 半纏 身欠鯨 繋ぎ連の鯨(10~20連) 菅縄緒(繋ぎづら)  
 菅莫座 砥石 砥石台 水桶 鯨差(身欠製造小刀)

鯨干場での木架は太い竿又と桁からなる。その木架の上に角材(早切)を載せ、天秤棒の先の洗い鉤に吊され魚坪から運ばれた尻繋ぎした身欠鯨を男と女が共同作業で早切に懸けている。木架が丈夫でないと、また早切に平均して荷重が掛からないと、身欠鯨の重さで木架が横倒しになり(これを留萌地方では「木架餅(なやもち)」という)、大損害を被ることになる。また、早切と早切の間は気候や風の通り具合などで調整して身欠鯨を干した。その調整により、乾燥時間が異なったからである。したがって、木架には適当に身欠鯨を架ければ良いというものではなかった。

女性であろう、木架の手前では菅莫座を敷き、鯨差を砥石で研いでいる。鯨差は身欠鯨を作るのに使うが、ここでは恐らく木架から落ちた身欠鯨を繋ぎ直して吊すために使用するのであろうか。大抵は木架の間の通路にも、簾や菅莫座を敷いて魚肥となる笹目(鰓)や白子、胴鯨(端鯨。頭部、背骨、腹部、尾の接続したもの)などを干したが、この図絵にはそれが描かれていない。さらに、鯨の粕焚き釜場も描かれていない。鯨粕の登場は19世紀の初めまで待たなければならない。

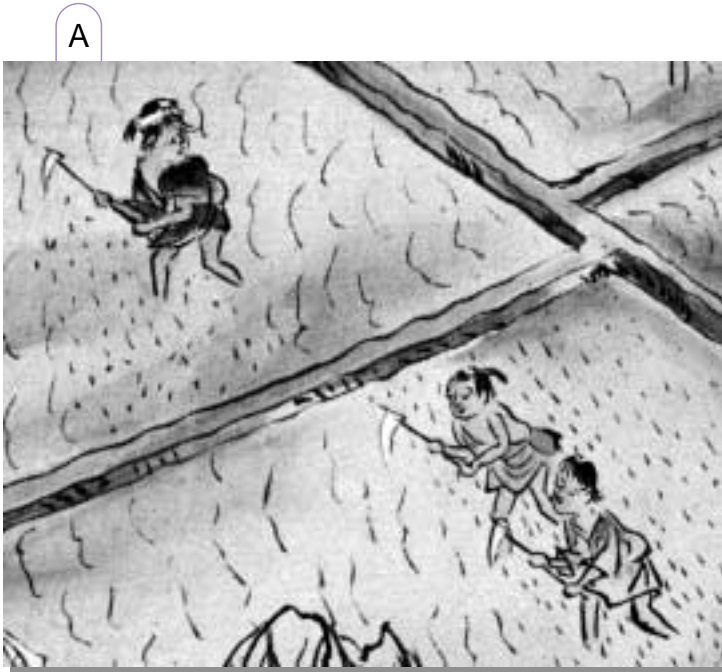
以上、清水隆久校註・執筆の『農業図絵』と、函館市中央図書館所蔵の『江指浜鯨漁之図』、『上ノ国材木流之図』の一部を紹介・使用して『絵図』を作成し、解説を

試みた。

次に、『農業図絵』に描かれた百姓の姿からいくつかの疑問点を提示してみたい。

『絵引』作成上での疑問点 『農業図絵』を例に

下記の(A)-(D)は『農業図絵』から『絵引』を作成しようとした時に、判断に迷った図絵である。



(A)-(D)の農作業中の人物は農婦か農夫か、みる人によって判断が分かれると思われる。江戸時代の農婦は、

一般的に股引か、前垂れをつけて農作業をしたといわれる。また、腰蓑は江戸時代の農夫のシンボライズともい

われてきた。こうしたことを踏まえて、いくつかの疑問点を提示してみたい。

まず、(A)は湿田の荒起こし後、土塊(亀という)を鎌で小割している図絵である。の人物は顔立ちからすると、女性のように見受けられるが、頭は丁髷に鉢巻き姿のようにも見受けられる。そのうえ裾上げをしながら鍬をもって耕作している。清水隆久氏も長島淳子氏もこの人物を農婦とみているが、前掛けをつけておらず、股引も履いていない。

(B)の の人物は麻苧を植えているところである。頭は丁髷に鉢巻き姿のようにも見受けられるが、襷掛けの

半股引姿であり、これは女性であろう。(C)は表田の草取りの様子で、草むしりをした草を土中にかき回している図である。白手拭いで頬被りし、襷掛けしている人物

は女性であろうか。清水氏は女性としているが、腰蓑を纏っている。(D)は表田の追肥の情景である。頬被りして腰蓑を付けた農夫が肥桶をもって施肥をし、その近くで姉さん被りの農婦 が肥桶を地面に置いて柄杓で下肥を撒布している。この農婦も腰蓑を着けている。農婦は前垂れや股引を着けずに農作業に従事することや、腰蓑を着けて農作業をするようなことが一般的であったのであろうか。

E



F



G



Pictures are nonwritten materials. Our work is dependent on written language.

We are trying to bring nonwritten information to the written world.

Our trial may be a contradiction. Because even until modern times,  
what can't be expressed in words is often expressed in pictures.

If using words was the most effective means to have expressed an idea,  
they would have used them and left us written messages.

次をみよう。(E)~(G)も農婦の図である。(E)は加賀笠の原料、萱を刈り結束している図、(F)は粟穂刈り、(G)は老婆が落ち穂拾いをしている図である。(E)の赤手拭の頬被りに赤褌掛けの女性は明らかにほかの女性たちとは出で立ちが異なる。萱刈りをしている(F)は若者ともみえるが、女性と推測され、前垂れも、股引も着けていない。着物の胸元をはだけさせながら孫と一緒に落ち穂拾いをしている(G)の老婆の場合は、前垂れや股引を着用していない。農作業以外、それが一般的だったのであろうが、農作業ではこうした前垂れや股引を女性が着用しないことが、どれほど普通のことであったのだろうか。

こうした疑問の提示に対して、小研究会では福田アジオ氏が一般的に東日本では女性は股引を、西日本では腰巻を着用するといわれているが、必ずしもそうではない

と指摘された。着用したり、しなかったりということか。

『農業図絵』の舞台、金沢近郊村が東日本、西日本のどちらの範疇に含まれるのか、はっきりしないが、女性の前垂れや股引、腰巻の使用、不使用が混用されていることから考えて、中間地帯の特徴を表わしているとみるべきか、そうではないのか、また、農夫のシンボライズといわれてきた腰巻の使用が女性にも広がっているのが事実とすると、腰巻は近世中期に農夫のシンボライズが形骸化し、その役割を終えつつあったと考えてよいのだろうか。こうした疑問点は一般的にいわれてきた近世期の女性の慣習、とくに既婚者の眉剃り、鉄漿、喫煙、町方女性の着物と着付け方などについてもある。『絵引』の作成には、検証を含めて考証を重ねなければならぬ留意点であろう。



## おわりに

小研究会では以上の『絵引』を提示しつつ、参加者を交えて活発な議論が行われた。『絵引』とは個々の切り抜いた図絵に一点一点、名称を付けていって完成させるが、果たして付けた名称が描かれた図絵の当時、そういう名称で呼ばれていたのかどうか。それよりも何よりも、屏風絵や図絵が果たして何処まで真実を描いているのか、また、その真実性をどのようにして検証できるのか、図絵の読み解きは何を根拠に読み解いていけばよいのか、その方法は、など数々の本源的な問題点が話し合われた。

しかし、問題解決のその有効な手立てもなく、『絵引』作成の時間的制約の中では現時点での力量を前提に『絵引』の作品化をせざるをえず、そのより一層の完成度の達成、間違いの訂正などは後世に委ねざるを得ないという結論に至った。つまり、何よりも試作段階であっても、批判を恐れずにそれを積極的に提示することに意義を見出すしかない。

そうしたこともあって、『絵引』作成の補強の意味を兼ね、またより一層の正確さを期して、年末には『農業図

絵』が描かれた御供田村などの地域を実地に踏査し、『農業図絵』の描写の真実性の確認を、現在も残る寺社などの聞き取りや資料館の文献などに当たることから試みた。その結果、現在も残る風景や寺社などにかなりの程度の真実性を確認できた。

『江指浜鯉漁之図』については、鷗島のようにまだ往時の姿をとどめているところもあるが、概して、江差町は江差浜海岸の埋め立てと産業道路の建設によって海岸線がかなり後退するなど、開発によって町の情景や景観がかなり変化してしまっており、往時の面影を発見することが難しい。しかし、江差でも往時の面影を残して存在する旧跡がある。それをヒントにイメージを作り上げていける。本稿に示した『絵引』は不完全さの残る、こうした手続きの上に試作したものであり、小研究会で寄せられた意見や誤りの指摘によって多少の手直しをして作成したものである。

最後に、『江指浜鯉漁之図』については、病気で若くして急逝された北海道開拓記念館の林健太郎氏から、学術

研究に資するという事で資料を提供され、多くのご教示もいただいた。感謝とともにご冥福をお祈り申し上げます。また、『絵引』作成の協力者である跡見学園女子大学の泉雅博氏をはじめ、同大学4年生の平岡諒子氏には史料調査・考証・分析などに多大なご助力をいただいた。小研究会には早稲田大学の児島恭子と長島淳子の両氏、

北海道開拓記念館の舟山直治氏にコメンテーターとして、他には同記念館の池田貴夫氏をはじめ、歴史民俗資料学研究所の院生諸氏にもご参加いただき、貴重な意見を賜った。とりわけ池田氏からは玉稿をお寄せいただいた。記して感謝申し上げます。

注

- (1) 菊池勇夫 2007 神奈川大学COE年報『人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号 p107-114。
- (2) 清水隆久校註・執筆 2005『農業図絵』(『日本農書全集』26巻5刷) 東京：農山漁村文化協会。
- (3) 田島佳也 2006-1「屏風絵を読むにあたって」『非文字資料研究』No.11：p10-13。  
2006-2『日本近世生活絵引』作成に向けての試み』『神奈川大学21世紀COEプログラム 第2回国際シンポジウム 図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』p74-97。
- (4) 北海道編 1937『新撰北海道史』第2巻通説1 p160-161、181。
- (5) 江差町編 1982『江差町史』第5巻通説1 表紙扉2枚目。これには「江差屏風とヒノキ山屏風」の題名が付けられている。
- (6) 澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編 1984『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻 viii-x 平凡社
- (7) 三谷一馬 1986『江戸商売図絵』東京：立風書房。ほかに風俗絵引シリーズとして、『江戸職人図聚』『江戸物売図聚』『定本江戸商売図絵』などを出版。ほかに、秋山高志ほか編 1991『図録 農民生活史事典』東京：柏書房。『図録 都市生活史事典』『図録 山漁村生活史事典』などもある。笹間良彦 1995『復元 江戸生活図鑑』東京：柏書房。高橋幹夫 1994『江戸萬物辞典』東京：芙蓉書房。高橋幹夫 1995『江戸商売絵字引』東京：芙蓉書房など。
- (8) 喜多川守貞著 朝倉治彦・柏川修一校訂編集 1994『守貞謄稿』第1～5巻 東京：東京堂
- (9) 浅野秀剛・吉田伸之編 2003『大江戸日本橋絵巻 熙代勝覧の世界』東京：講談社

参考文献

- 北海道教育委員会 1970『日本海沿岸ニシシ漁撈民俗資料調査報告書』  
高橋明雄 1999『鯨』北海道：北海道新聞社  
宮下正司 1991『江差風土記』自費出版  
北水協会 1977『北海道漁業志稿』東京：国書刊行会

公開研究会概要

1班「『近世・近代生活絵引』編纂」公開研究会

「人びとの暮らしと生業 『日本近世生活絵引』作成への問題点をさぐる」

日時：2006年12月16日(土) 13:30～17:00

会場：神奈川大学横浜キャンパス21号館405室

報告： 菊池 勇夫「菅江真澄がみたコタンの景観」

\* コメンテーター：児島 恭子(早稲田大学講師)/舟山 直治(北海道開拓記念館学芸員)  
田島 佳也「土屋又三郎『農業図絵』に描かれた城下金沢と近郊村に生活する人びと」  
「江差浜における鯨漁と加工に勤しむ人びと 『江指浜鯨漁之図』から」

\* コメンテーター：長島 淳子(早稲田大学講師)/舟山 直治

討論 『日本近世生活絵引』作成の諸問題について

